

302. 下五反田遺跡検出の焼失住居

下五反田遺跡は高島郡安曇川町田中地先に位置する。平成12年度に県道小浜朽木高島線道路改良工事に伴い約3,400m²を対象に発掘調査を行ない、弥生時代から鎌倉時代にかけて継続した集落の存在が明らかになった。

当調査では、弥生時代から奈良時代にかけて27棟の竪穴住居が確認され、その中で今回は調査区北部に位置する7世紀後半で検出された状態で検出された竪穴住居を紹介する。

竪穴住居の概要

竪穴住居の規模は南北6.6m×東西5.0m、深さ0.7mを測る。住居の埋土は礫混じりの黄褐色土で、下層に約10cmの厚さで炭化した建築部材や焼土が堆積していた。

住居の南東隅にはカマドが取り付けられ、主柱穴は検出されなかった。住居はほぼ全面に黄色粘土で貼り床が施されており、床面の大半と壁面の一部は焼けて赤変している。床面からは炭化した板材をはじめとする建築部材と土壁が出土した。(第1図参照・写真1)

炭化した部材の残存状況が極めて良好であるのは住居の北辺・東辺である。以下説明を行う。

住居北辺では板状の材計8枚が住居壁から内部に向かって並んで倒れこむように出土した。板材の規模はほぼ同様で幅は約15cm、長さは最大で約50cmである。これらの下からはこの板材に直交するようにして長さ約1.3m×幅約6cmを測る横方向の材が出土した。

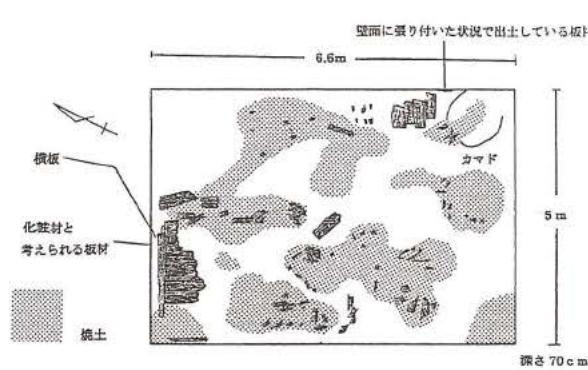
東辺からは北辺と同様の状態でカマドの北側で板材が4枚出土した(写真2)。残存状態の良いもので長さ60cm×幅15cmを測る。これに加え、13cm四方の板材一枚が壁面に貼り付いた状態で、唯一当時の状況のまま出土した。

この1枚の板材の出土により、住居床面に倒れこんで出土した板材は、この板材と同様に壁面に化粧板として立て並べて巡らしてあったものが焼けて床面に倒れこんだ状態であったと考えられる。

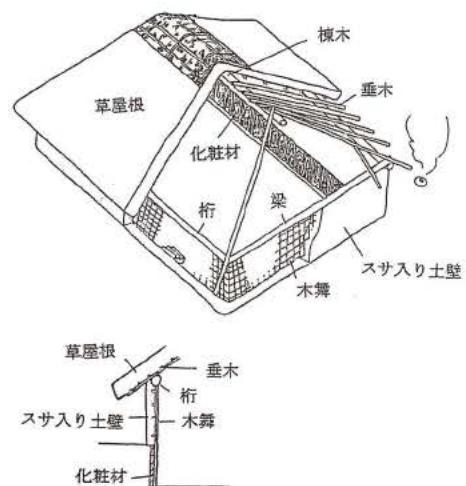
住居中央部でも炭化した板材等が多数出土しているが残存状況は悪く部材の形状は確認できない。

土壁

竪穴住居から10点余りの土壁が出土した。土壁は破片でほとんどが埋土内からの出土であるが、床面直上で出土したものもある。最大のものは34.5cm×34cm、



第1図 竪穴住居焼失状況略図



第2図 竪穴住居復元図

厚さは最大のもので14.5cmである(写真3)。土壁は面を持ち、断面などでスサ(稻藁など)が多数確認できることから、現在の土壁などと同様に、土壁の補強材としてスサを混ぜていたようである。

住居の復元

通常検出される竪穴住居は地面を掘り込み、床面からは屋根を支えるための柱穴跡や壁溝などが検出され、屋根を竪穴周縁部まで葺き降ろす形態の住居が復元されるが、当住居では第2図のような住居が復元できる。

まず、住居の構造は地面を掘り込む竪穴住居であるが、柱跡が無いことと土壁が出土していることから、住居の地上部に壁を立ち上げ、屋根の軒を支える「壁立式竪穴住居」であることが復元できる。

屋根は草葺や土屋根が考えられるが、土屋根の場合火災時に柱等が焼け、土屋根の重みで屋根が落下した結果、垂木などの部材が完全に燃えず、炭化して復元に良好な状態で検出される例が多い。今回は住居北部や中央部で検出した板材の小片などの部材が垂木や桁・梁であると考えられるが、残存状況は非常に悪く、床面も強く焼けていることなどから屋根は草屋根で壁の倒壊と同時に屋根や建築部材が住居内で燃え尽きたものと考えられる。

壁の構造であるが出土した土壁や部材から、壁部に縦横の木舞を配し、地面を掘り込んだ部分には内側に化粧材を立て並べ横方向の材で留め、地上に立ち上げる部分には壁を塗り上げたものであると想定される。

まとめ

以上本例は、住居が焼失し残存していた部材と土壁から壁立式住居であり、土壁を用い住居内面には化粧板を巡らすなど非常に丁寧な構造であった住居が復元できる貴重な資料である。

また、住居の時期は7世紀後半と考えられ、面積は33m²とこの時期の竪穴住居としては大型であることから村の長クラスの住居と想定でき律令期における社会構造を知る上で貴重な資料となった。より具体像については整理調査で明らかとしていきたい。

なお、竪穴住居の復元にあたっては東北芸術工科大学教授宮本長二郎氏の御教示を得ました。

(財)滋賀県文化財保護協会 清水ひかる)

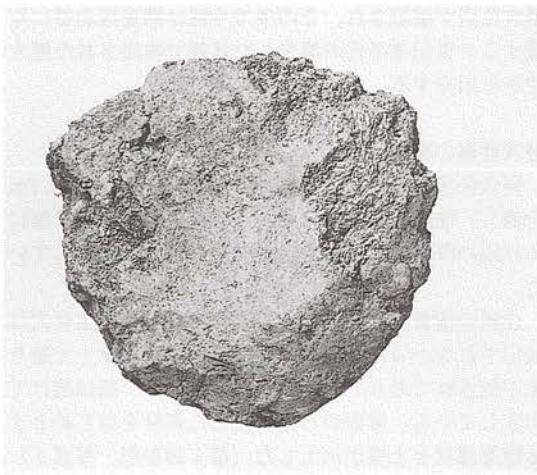


写真3 土壁



写真1 竪穴住居焼失状況



写真2 化粧板出土状況

303. 北牧野古墳群の調査

〔はじめに〕

北牧野古墳群は、100基近くの数が確認されている後期群集墳で、近接地には古代製鉄遺跡があることからこれら製鉄集団との関係が注目されている古墳群である。調査の対象となった2基は、直径14~15m、高さ2mの円墳で、6世紀後半頃のほぼ同じ時期にほとんど接して築かれている。主体部はともに南に開口する右片袖の横穴式石室である。いずれも天井石が崩壊して石室内に落ち込んでいたが、2基とも多くの遺物が出土した。

〔2号墳の概要〕

2号墳は未盗掘で、羨道閉塞石が良好に残存していた。石材は全壁とも比較的小型のものを用いている。石室規模は玄室長3.1mで、奥壁部(1.1m)から玄門部(1.6m)にかけて緩やかに広がっている。玄室床面は礫床で、中央部には赤色顔料が確認できた。羨道の幅は1mで玄門部には扁平な石材を立てて置き、石材頂面まで土を充填して玄室床面よりも一段高くしている。閉塞石は丁寧に積み上げて面を呈している。羨門部は調査していないため詳細は不明であるが、表面観察から羨道の長さは2.8m以上と推定できる。

副葬品は奥壁部と袖部とにわかれて出土している。袖部からは須恵器(杯身・杯蓋・高杯・提瓶・横瓶・短頸壺・ハソウ)のみがまとまって出土し、奥壁部からは須恵器(杯身・杯蓋・有蓋高杯)、鉄鎌一括、鉄斧、大刀、耳環、ガラス小玉などが出土した。有蓋高杯は脚部を打ち欠き、杯とともに並んだ状態で検出したが、打ち欠いた脚部は羨道部階段状施設の充填土内から出土した。

鉄鎌は切先を床に向け北西隅でかたまって出土して



2号墳副葬品出土状況（東から）

おり、壁面に立て掛け副葬されたものと想定できる。

大刀は金銅製単龍環頭大刀で、玄室の奥壁に立て掛けたような状態で出土した。環頭は柄木が腐朽して下に落ち込んだ状態で出土しているが、全体の長さは約80cmと推定できる。環頭は7.2cm×5.7cmの楕円形で、外縁にも龍を2匹彫りしている。環内の龍は頭部のみで、牙を持つ口から舌または雲気を出すタイプのものである。目や頬鬚などきわめてシャープに肉彫りされ、鱗などの表現にも文様の崩れのほとんどない精巧な作りで、単龍環頭としては古い様相を呈している。

副葬品以外の遺物では、墳丘南西斜面から須恵器片が、東側周溝から土師器片がそれぞれ出土している。

〔3号墳の概要〕

3号墳は2号墳に比べて石材は若干大きめのものを使用しており、石室の規模は全長8.4mである。玄室長3.8m、玄室幅は1.6~1.9mで平面プランは玄室中央よりやや玄門部側で最大幅を持ちわずかに胴張りを呈する。玄室床面には板石を敷いている。羨道は入口から玄室にむかって傾斜しており、玄門部には段を持たない。

奥壁は細長い台形の石材を横置きして鏡石としている。その上に石材を横置きで積み上げているが、上部の石材は徐々に幅が狭まっており、両側壁を持ち送っていたことがわかる。

2号墳と同様、平面プランは右片袖であるが、左側壁玄門部の石材はほかに比べて大きく袖石と同程度の高さを有しており、袖を意識して構築していることがわかる。このように、3号石室の構造は2号墳と少し異なる特徴をもつ。

副葬品は石室内に散乱した状態で出土している。玄室内からは須恵器(杯身・杯蓋・高杯)、鉄鎌、耳環、ガラス小玉などが、羨道部から土師器(甕)、石製三輪玉が出土した。三輪玉は大刀の柄に付く勾金・勾革と呼ばれる護拳帯を飾るものである。大刀本体は出土し



3号墳墓壙上面列石検出状況（南から）

ていないが、2号墳と同様、装飾付大刀が副葬されていた可能性がある。

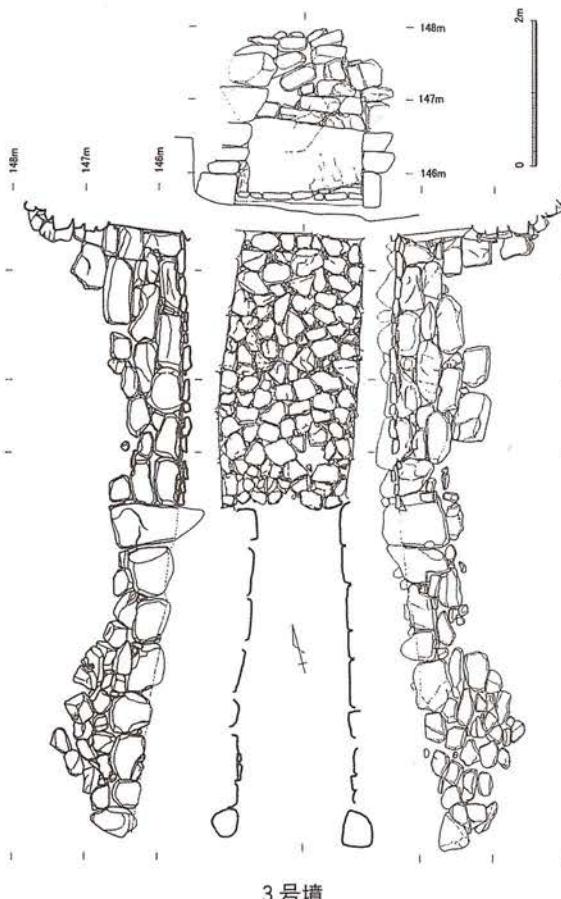
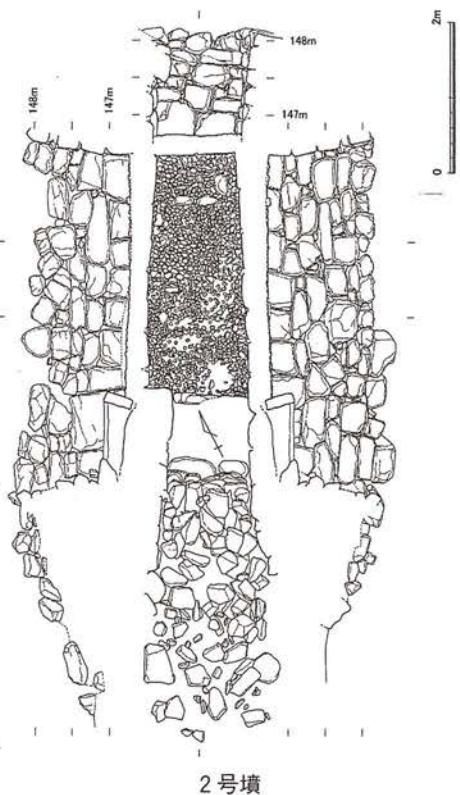
墳丘裾付近には2・3段に積まれた石垣状の列石が、石室墓壇上面には列石がそれぞれ巡り、墳丘の構築に際しての工夫が見受けられる。さらに、墳丘盛土内からは土師器・須恵器などが出土しており、築造時に何らかの行為を行っていたことがわかる。

〔装飾付大刀〕

県内で出土した環頭大刀は4例確認されている。玉をくわえた单龍環頭が竜王町鏡山古墳から出土しており、他の種類として、朝鮮半島製とされる双龍環頭が高島町稻荷山古墳から、三葉文環頭が新旭町二子塚古墳から出土している。また、三輪玉は金銅製のものが浅井町雲雀山古墳と高島町稻荷山古墳から、水晶製のものが近江町山津照神社古墳から出土している。

環頭大刀の系譜としては、单龍環頭が朝鮮半島の百濟系、双龍環頭が高句麗系といわれ、それぞれの系列の豪族が製作や配布に関係していたのではないかと考えられている。高島町稻荷山古墳は馬具や金銅製装飾品など豪華な副葬品を有する前方後円墳であるのに対し、北牧野2・3号墳は小円墳であり、装飾付大刀が副葬された経緯が注目される。たとえば、高島郡内には製鉄に関係する遺跡が数多く分布しており、北牧野古墳群の北には北牧野製鉄遺跡群が隣接する。古墳時代に遡るもののが存在したと仮定すると、当古墳群は中央に鉄を供給するための技術者集団の墳墓群で、2号墳はその長の墓であったのではないかとすることもできる。同様に、鏡山古墳の周辺も須恵器の一大生産地であり、被葬者と技術者集団との関わり合いが考えられる。

(財)滋賀県文化財保護協会 大崎 康文)



北牧野古墳群石室実測図 (S = 1:100)